



解説記事

## 2000年代の水産物購入にみる食の平均化と地域差

The Making Balance for Meal and the Difference between Regions for Food Lifestyle  
Focused on Fisheries Commodities Purchase in the 2000s

林 紀代美

HAYASHI Kiyomi

本研究は、2000年代における水産物購入における「平均化」の進展状況と都市間での購入構成のばらつきを考察することを目的とする。考察の結果、水産物の購入構成に関しては、特にサケなど主要な生鮮魚介については、2000年代においても都市間の差異がより大きい過去の傾向に戻らなかった。購入構成が類似する都市は、三つの類型、六つの下位区分に整理された。このグループは過去の傾向を踏襲しており、水産物の購入構成の観点からみた「地域差」と分布傾向は2000年代においても継承されていた。

The purpose of this study is to investigate the progress of making balance on fisheries commodities purchase and to examine the difference of purchase constitution between cities in the 2000s. As a result, considering the difference for purchase constitution, the tendency did not return to condition as the past which have had bigger gap between cities for purchase constitution, especially regarding principal fresh seafood, for instance, salmon. Cities which have resemblance for purchase constitution were classified into 3 groups and 6 subdivisions. The difference between regions and the distribution tendency from the viewpoint of purchase constitution have been inherited even in the 2000s, considering that these groups follow the tendency in the past.

キーワード：水産物購入、食の平均化、食の地域差

Key words: fisheries commodities purchase, the making balance for meal, the difference between regions for food lifestyle

### I はじめに

戦後、(食)生活の変化や生産・流通などの技術進歩、販売や調理の形態の変化などに伴い、食事の内容が全国的に等質化に向かう「食の平均(標準・均一)化」が進んだ。その一方で、今なお地域独自の食生活の特徴が引き継がれ「食の地域差」が存在していることも経験的に認知され、これまでも指摘されてきた(秋谷 1988; 小川 1998; 高橋 2002)。

水産物購入の地域的傾向を分析した研究は、これまでも諸分野で蓄積されてきた(長谷川 1979; 秋谷 1988, 2006; 山口・高橋 1982; 小野 1994; 堀

井 1996; 仙田・吉田 2002; 有路 2006)。ただし、水産物を含めて、食品それぞれの平均化の経過や品目間での平均化の程度の比較は、考察が不足していた。また、水産物に的を絞った購入の地域性や、特定の品目に関する購入傾向や食文化・習慣の伝承についても、検証は少ない(多屋 1991; 佐々木・大石 1994; 小川 1998; 今田・藤田 2003; 中澤・三田 2004)。研究方法にも、いくつか限界がある。たとえば、地域により購入金額の総額や販売価格には差があり、各品目の金額規模(実数)を用いた比較では地域ごとの購入上の重要魚種を十分に評価できない。購入金額の年次変動の影響も、考察上の障害となる。年次や品目によっては

重量について統計情報の集計がなされていないため、「食べている量の多少」の観点から水産製品の消費の全容やその推移を明らかにすることができない。

上述の課題を踏まえて筆者は、1960年から1990年代の水産物購入傾向の地域の特徴を考察した(Hayashi 2003)。ここでは、都道府県庁所在市別の1世帯当たり水産物購入額の内容構成(すなわち、品目選択の「組合せ」や各品目の重要度)に注目することとした。この考察から、購入品目の組合せは都市間で次第に類似してきており、多くの水産製品で都市間での購入割合の差の縮小が確認された。このように「平均化」が進む一方で、特定の品目の購入割合が高い・低い都市群や、購入構成が似ている地点の分布傾向には大きな変化はみられず、「地域差」、地域らしさも残存していることが分かった。

Hayashi (2003) の取り組みからおよそ10年が経過した。その後の2000～2009年の10年間(以下、2000年代)の食料供給、水産物の流通・消費には、盛んに取り組まれるようになった活動や一層注目されるようになった課題がみられる。たとえば、「食の安心・安全」や“顔の見える”食品への関心の高まりを背景とした、食品の持つ性質・地域性への人々の注目、国産品へのこだわり・再評価、「地産地消」や地域資源のブランド化とその影響は特筆されるトレンドであり、今日の食料供給に関わる活動・研究においても重要視されている(Nygård and Storstad 1998; Murdoch et al. 2000; 高橋 2002; 小川ほか 2003; 高柳 2006; 池田 2005; 篠原 2005; 荒木 2006; 久賀 2008)。そのほかにも、食材・食文化を活かした地域振興や「食」に関わる学びの活発化(高島 2005; 林 2007; 若林 2008)、生産・流通活動に伴う環境負荷への警鐘(中田 2004)、地域資源を有効に扱う機会の創出(竹ノ内 2005; 二木 2004; 三木 2006; 日高 2007)、景気低迷の影響や消費の二極化の進行(荒井 2007)などが指摘できる。

このような食品・食文化に関わる地域に人々が関心を持ち易い状況がみられるなかで、2000年代の水産物購入の地域特徴は、従前のそれと比べて

違いが生じているのだろうか。そこで本稿では、47の都道府県庁所在市(以下、都市と省略)の世帯における2000年代の水産物購入傾向に注目し、その平均化の状況、傾向が類似する地域の広がりやを考察することを目的とする。この取り組みは、食生活の変化や地域の食文化への人々の関心を醸成し、水産物をはじめとする今日の食料の生産・流通・消費の方法やあり方を関係者間で再考し、改善する動機づけになると期待される。また、人々の生活に不可欠な「食」という行動から地域性の一端を明らかにするため、より多くの人々に対して地域への関心を促し、事象の分布・広がりやを考察し、それを表現する意義や魅力をより身近に感じる助けとなる可能性がある。

本稿での考察も、Hayashi (2003) で採った方法に準じている。分析に用いたデータは、『家計調査報告』(2000～2009年版)に示された水産関連の品目(42区分)の「都道府県庁所在都市別1世帯当たり年間購入金額」を基に、各都市の水産物の総購入額に占める各品目の購入額の割合を算出したものである。年次変動を考慮するため、各品目の購入割合について10年間の平均値を算出した。これを分析に用いて、各購入品目が総金額に占める割合のばらつきの度合いや、購入内容の構成に関する都市間の類似性、それらの変化を考察する。当該データは、各都市での購入状況であり、各都道府県でみられる傾向をすべて反映するものではない。しかし本稿の結果は、全国のなかでみた水産物購入の地域傾向を知る上で有意義な情報を含む。

## II 購入内容の構成のばらつき

まずIIでは、タンパク質摂取に関連する主要品目の購入に占める水産物の位置づけを概観する。その後、ローレンツ曲線・ジニ係数を用いて、各都市の水産物購入における品目構成のばらつきの程度と、主要品目の購入割合が全国の中で上位・下位に位置する都市を考察する。なお、過去の傾向との比較には、1970年代の結果を用いた。1960年代と比して1970年代にはすでに「平均化」が進

行し始めていたが、沖縄県が返還されて 47 都市での考察が可能となった年代であるため、この二つの年代に注目することとした。ただし、1970 年代と 1990・2000 年代では、統計の集計品目が整理、統合されたため、調査対象品目が完全には一致していない。この点は、あらかじめ留意頂きたい。

まず、タンパク質摂取に関わる主要品目（「魚介類」、「肉類」、「乳卵類」）の購入について、総額に占める各々の品目の割合を確認しよう。2000 年代の全国での購入構成は、「魚介類」45.5 %、「肉類」34.8 %、「乳卵類」19.8 %であった<sup>1)</sup>。47 地点の購入に占める「魚介類」の割合は、36.6 %（那覇市）から 53.5 %（青森市）の間に分布した（図 1）。購入割合が高い都市には、水産業が盛んな地域の都市が多く含まれる。一方で、内陸に所在する前橋市・甲府市・長野市で購入割合が比較的高い点も興味深く、選択される品目やそれらの販売価格が結果に影響を与えていると推測される。

那覇市の「魚介類」割合の低さは、肉食中心の食事構成が影響している（金城 1997; 平安山・村田 2006）。水産物購入に占める「生鮮魚介」の割合が全国平均（53.4 %）より高い都市は、金沢市（59.3 %）を筆頭に、北陸・近畿地方以西の都市に多い。一方、最も割合が小さい甲府市（47.7 %）をはじめとして、北海道から中部地方にかけての多くの都市では、何らかの加工を施した水産物の購入割合の方が高い傾向にある。

次に、都市間での購入構成のばらつきを検証する。平均化の進行程度は、品目により違いがみられる。各品目の 1970 年代のジニ係数と 2000 年代のその推移を、表 1 にまとめた。これによると、この 30 年ほどの間に「平均化」が特に進行した水産物として「サケ」、「しらす干し」や、「カツオ」、「タイ」、「アサリ」、「干しアジ」、「ウナギかば焼き」が挙げられる。そのほか、「サバ」、「ワカメ」や、「マグロ」、「サンマ」、「ブリ」、

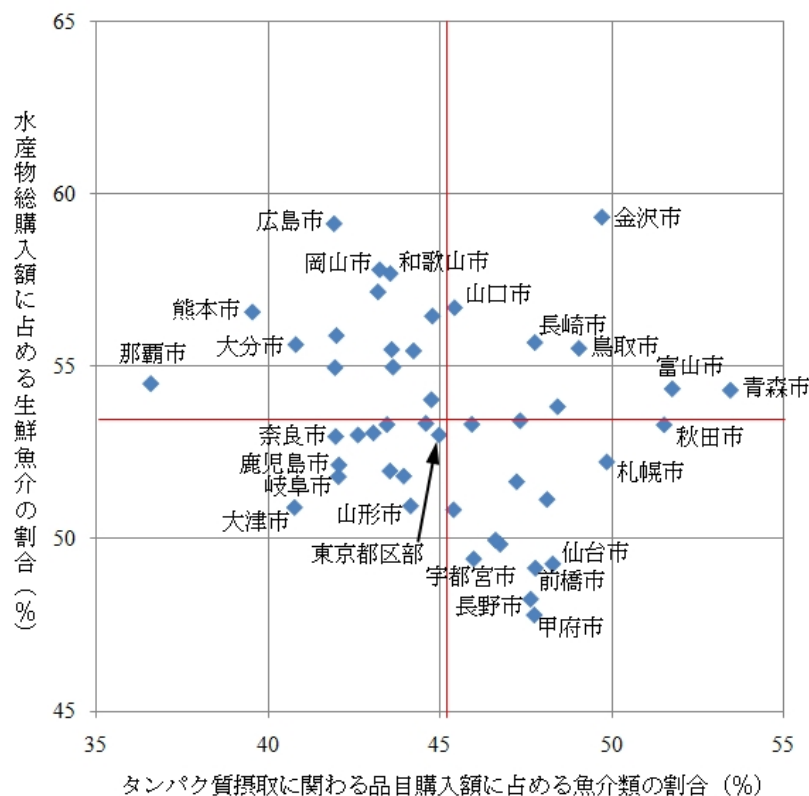


図 1 都市別の水産物購入の特性

Figure 1 Characteristics of fisheries commodities purchase for each cities

表1 品目別ジニ係数の推移

Table 1 Changes in the Gini coefficient for each commodities

		2000年代のジニ係数					
		～0.09	0.10～0.14	0.15～0.19	0.20～0.24	0.25～0.29	0.30～
1970年代のジニ係数	～0.09	イカ					
	0.10～0.14		干しのり				
	0.15～0.19		タコ, 昆布				
	0.20～0.24			魚介缶詰, 昆布佃煮	カキ, かまぼこ		
	0.25～0.29		ワカメ	サンマ	イワシ, 干しイワシ, 揚げかまぼこ, ちくわ	塩サケ	
	0.30～0.34		アサリ, ウナギかば焼き	サバ	ブリ, タラコ, 魚介佃煮	シジミ, 鰯節・削り節, 魚介漬物	アジ, カレイ, 煮干し
	0.35～0.39						
	0.40～0.44			サケ			マグロ
	0.45～0.49					干しアジ	
	0.50～0.54						カツオ, タイ
	0.55～						しらす干し

『家計調査年報』(各年次), Hayashi (2003) より作成.

「タラコ」, 「魚介佃煮」なども, 都市間での購入割合の差が大きく縮小している.

これらの品目に関しては, 輸入品・原料が利用される機会の増加や量販店での販売戦略などの影響を受けて, 全国的に受容され, 食卓での重要度が増大する事態が創出されてきたことが言及されている(小野 1986; 秋谷 1995; 田坂 1999; 本多・小野 2000; 佐野 2003; 増井 2003; 中原 2008). また, 食の洋食化・簡便化の進展, 食材の旬・季節的需要や出荷地域の限定性に縛られない販売の発生により, 販売・消費形態に変化が生じて, 販売が拡大した品目の存在についても指摘がある(吉田 1988; 片岡 2002; 辻 2003; 中居 2003a; 増井 2003).

1990年代から2000年代にかけてのジニ係数の推移については, 「カニ」, 「シジミ」, 「揚げか

まぼこ」, 「塩サケ」などで値の上昇がみられたものの, 家庭内調理の主な食材である生鮮魚介を中心に多くの品目では1990年代と同値あるいは低下していた(表2). ただし, 2000年代のジニ係数の低下の程度は僅かである. Hayashi (2003) で指摘したように, 地域差が完全に消滅することは非現実的であることから, これ以上極端に平均化が進行する可能性は低いと思われる.

とりわけ「サケ」は, 2000年代でも購入割合が増加し, 平均化も一層進行した点で特筆される. 「サケ」については, 周年販売が可能で, 価格の手ごろな輸入品・養殖品の流通拡大と, 生鮮食の増加や, 脂質が多いことから洋食を含む多様な献立への採用がみられることなどが背景となり, 全国的に販売・消費が拡大している点が指摘されている(秋谷 1988, 2006; 佐野 2003; 増井 2003).

表2 品目別の都市間での購入構成のばらつき  
Table 2 Scattering of cities for each commodities  
purchase proportion

単位…上段：平均値 下段：ジニ係数					
	1990 年代	2000 年代		1990 年代	2000 年代
マグロ	5.44 0.35	5.79 0.31	塩サケ	2.77 0.24	2.07 0.26
アジ	2.19 0.30	1.92 0.31	タラコ	2.72 0.23	2.99 0.23
イワシ	1.01 0.24	0.83 0.24	しらす 干し	1.04 0.33	1.35 0.32
カツオ	1.85 0.37	2.08 0.33	干しアジ	1.18 0.27	1.08 0.25
カレイ	2.00 0.31	1.69 0.31	干し イワシ	0.55 0.21	0.47 0.21
サケ	2.17 0.20	3.66 0.15	煮干し	0.72 0.31	0.58 0.31
サバ	0.78 0.18	1.23 0.18	その他の 塩干魚	7.94 0.12	7.92 0.11
サンマ	1.11 0.18	1.41 0.17	揚げ かまぼこ	2.40 0.21	2.70 0.24
タイ	1.18 0.42	1.59 0.40	ちくわ	1.82 0.22	1.75 0.21
ブリ	3.25 0.25	3.69 0.24	かまぼこ	3.29 0.19	3.47 0.20
イカ	3.44 0.09	2.89 0.09	その他の 魚肉製品	1.33 0.23	1.23 0.20
タコ	1.38 0.15	1.32 0.13	鰹節・ 削り節	1.08 0.25	1.10 0.25
エビ	4.65 0.11	3.60 0.12	魚介漬物	3.16 0.26	2.95 0.28
カニ	2.35 0.22	2.39 0.24	魚介佃煮	1.06 0.27	1.27 0.24
その他の 鮮魚	9.55 0.17	8.84 0.15	魚介缶詰	2.62 0.18	2.48 0.18
刺身盛り 合わせ	5.62 0.16	5.74 0.15	他の魚介加 工品その他	2.59 0.13	2.89 0.11
アサリ	1.11 0.14	1.10 0.13	干しのり	2.94 0.13	2.86 0.12
シジミ	0.63 0.25	0.64 0.26	ワカメ	1.23 0.16	1.48 0.13
カキ	1.07 0.22	1.10 0.21	昆布	1.11 0.13	1.29 0.12
ホタテ ガイ	1.16 0.21	1.36 0.19	昆布佃煮	1.09 0.20	1.25 0.15
その他の 貝	0.73 0.17	0.62 0.18	ウナギ かば焼き	3.49 0.13	3.35 0.14

『家計調査年報』各年次より作成。

なお、同じサケ製品でも「塩サケ」は、この10年間で購入割合がさらに低下し、ジニ係数が拡大していて興味深い。これについては、食の多様化や減塩志向などの嗜好の変化が生じる中で、同じ魚

介類が用いられていてもその品質の特徴や加工方法などの違いにより購買者による選択がなされ、その偏りが拡大しているものと推測される。このほかにも、購入の地域差の説明で例示されやすい「タイ」と「ブリ」や、「マグロ」、「カツオ」、「ホタテガイ」、「ワカメ」などでも、購入割合の拡大とジニ係数の低下がみられた。早期に各地の食卓への浸透がみられた「エビ」や「ウナギかば焼き」などで、2000年代には購入割合の縮小とジニ係数の若干の上昇がみられた。今後の経過に注目して、その原因などの検証を待ちたい。

続いて、購入に占める各品目の割合が高い・低い都市について注目してみよう。図2は、主な品目について、購入割合が47都市の中で上位・下位に順位づけられる地点を地図上に示したものである。参考として、1970年代の場合の上位・下位都市について、表3に示しておく。

2000年代の各品目の購入活動でも、過去の傾向と同様の地域的偏りがみられる。すなわち、ある品目について「魚食行動のなかで多用する・重視する（あるいは支出の多さが一定程度容認されている）」地域とそうではない地域との分布傾向には今期も大きな変動はみられなかったことになり、「地域差」や「地域らしさ」は継承されているといえる。水産物購入にみられる地域的な偏りは、品目によっては日本海側と太平洋側での対比もみられるが、西南日本と東北日本との間での対称的な分布が主要な特徴として指摘できよう。そのほかにも、生産・加工活動の立地や地域の食文化の影響から、特定地域で購入割合が高くなっているケースもみられる。

以上をまとめると、2000年代においては、サケなどで全国の食卓での主要品目化が進んでいる点や、主要な生鮮魚介品目でジニ係数の低下がみられる。この点を鑑みると、食品・食文化に関わる地域に人々が関心を持ち易い状況がみられた2000年代にあっても食の多様化・簡便化や流通の変化の影響は大きく、2000年代の傾向が1990年代以前にみられたような地域の食卓の特徴にまで逆戻りする状態に至らなかったといえよう。なお、個々の品目や都市（地域）での購買傾向の変化につい

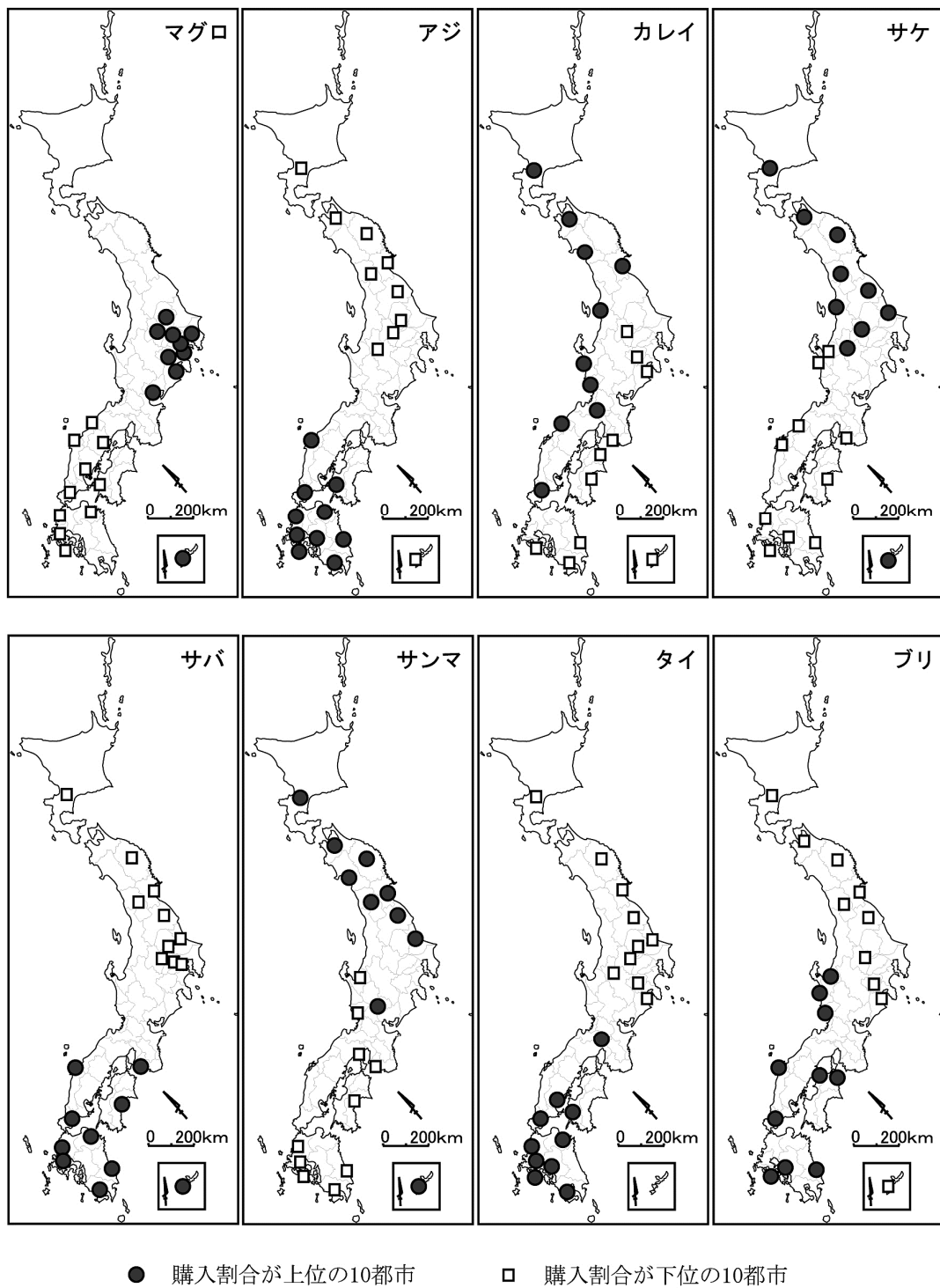


図2 主な品目に関するローレンツ曲線上の配列（2000年代）

Figure 2 Order of cities on the Lorenz curve for main commodities, 2000s

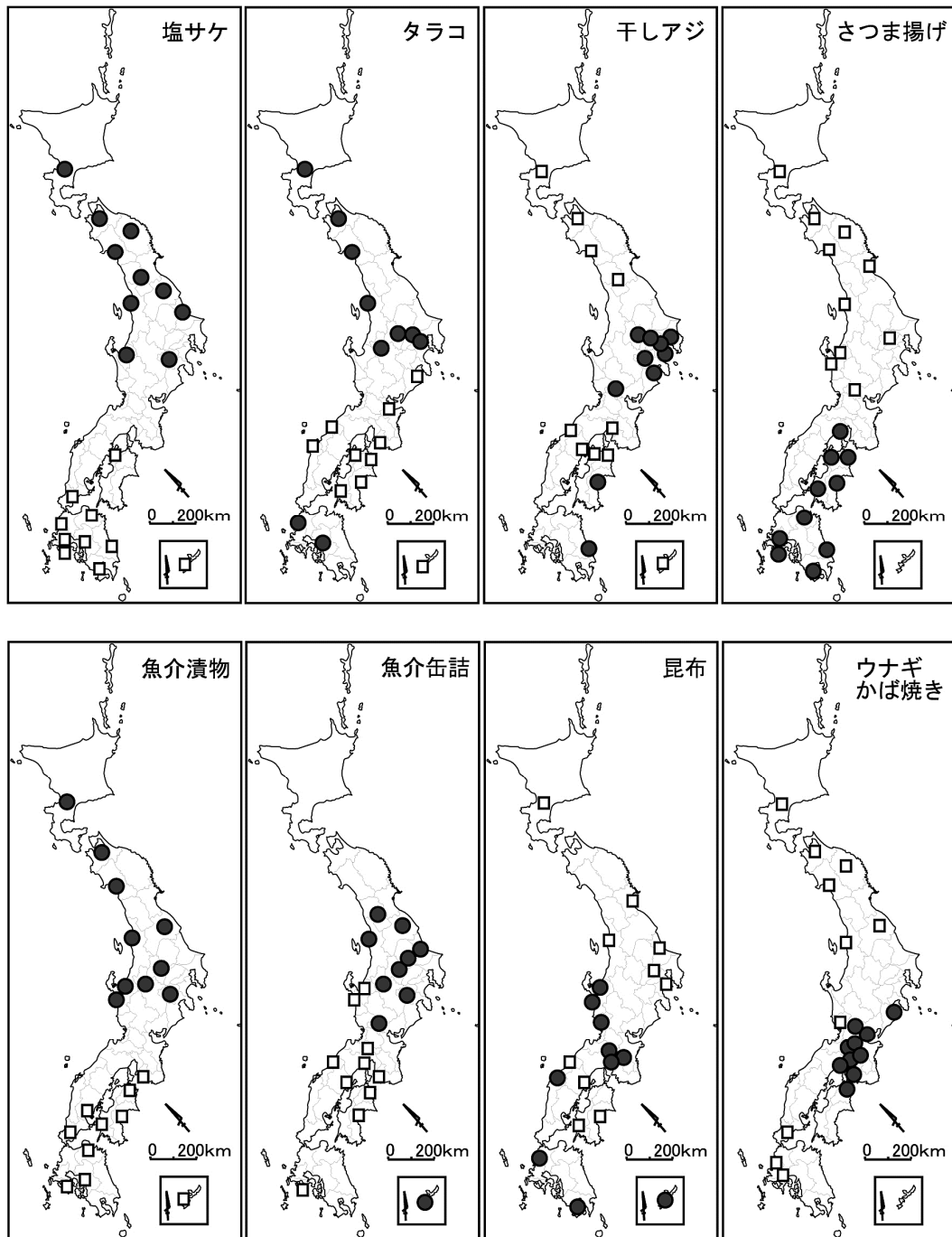


図2 (続き)

Figure 2 (continued)

『家計調査年報』各年次の集計結果より作成.

表3 主な品目に関するローレンツ曲線上の配列 (1970年代)

Table3 Order of cities on the Lorenz curve for main commodities, 1970s

品目	上位10都市	下位10都市
マグロ	静岡・甲府・横浜・福島・名古屋・那覇・津・長野・宮崎・山形	松江・岡山・鳥取・福岡・長崎・山口・広島・高松・佐賀・新潟
アジ	宮崎・大分・鹿児島・長崎・山口・松江・佐賀・松山・千葉・高知	札幌・那覇・青森・山形・盛岡・福島・仙台・長野・秋田・前橋
カレイ	鳥取・仙台・金沢・青森・札幌・福井・秋田・大津・新潟・福島	那覇・静岡・鹿児島・甲府・前橋・宮崎・高知・徳島・宇都宮・長野
サケ	札幌・水戸・長野・盛岡・新潟・前橋・秋田・山形・仙台・福島	鹿児島・長崎・那覇・宮崎・熊本・大分・松江・鳥取・佐賀・松山
サバ	鹿児島・大分・松江・宮崎・佐賀・福岡・熊本・鳥取・和歌山・山口	山形・福島・盛岡・水戸・仙台・札幌・前橋・東京・宇都宮・青森
サンマ	長野・水戸・前橋・仙台・福島・那覇・甲府・宇都宮・岐阜・山形	鳥取・長崎・金沢・富山・松江・鹿児島・熊本・福岡・佐賀・宮崎
タイ	佐賀・熊本・那覇・福岡・長崎・鹿児島・山口・松山・大阪・広島	札幌・盛岡・仙台・甲府・福島・山形・前橋・水戸・青森・福井
ブリ	富山・金沢・松山・長崎・徳島・福井・和歌山・福岡・鹿児島・高松	那覇・札幌・前橋・青森・甲府・福島・盛岡・静岡・山形・宇都宮
塩サケ	新潟・札幌・盛岡・秋田・長野・水戸・甲府・青森・山形・福島	那覇・高知・鹿児島・長崎・松江・宮崎・佐賀・大分・鳥取・松山
タラコ	新潟・長野・前橋・青森・秋田・金沢・札幌・宇都宮・浦和・東京	那覇・高知・徳島・松江・和歌山・長崎・鳥取・津・松山・高松
干しアジ	横浜・甲府・東京・静岡・浦和・千葉・宮崎・高知・名古屋・前橋	那覇・鳥取・青森・札幌・高松・広島・秋田・岡山・仙台・徳島
さつま揚げ	鹿児島・高松・長崎・徳島・大阪・高知・神戸・松山・奈良・佐賀	青森・秋田・札幌・那覇・福井・新潟・盛岡・富山・金沢・名古屋
魚介漬物	前橋・甲府・宇都宮・長野・金沢・富山・秋田・札幌・福島・山形	松山・長崎・徳島・高知・津・広島・和歌山・高松・奈良・大阪
魚介缶詰	那覇・岐阜・長野・横浜・名古屋・静岡・水戸・浦和・前橋・東京	高知・金沢・富山・徳島・京都・高松・大阪・鳥取・神戸・札幌
昆布	富山・那覇・福井・福岡・金沢・鹿児島・京都・神戸・大津・松江	新潟・横浜・水戸・徳島・津・前橋・東京・浦和・名古屋・千葉
ウナギ かば焼き	岐阜・京都・大津・名古屋・静岡・大阪・奈良・東京・浦和・津	青森・札幌・秋田・新潟・盛岡・福井・高松・山口・山形・那覇

Hayashi (2003) より作成.

ては、今後の研究の中でもその詳細を考察し、経過や要因の解明が進められることが望まれる。

一方で、それぞれの品目をより好む都市（地域）の分布には大きな変化は見られなかった。つまり、購入割合の開きは小さくなりつつあるものの、従前から品目の購入にみられる地域性は2000年代にあっても堅持されているといえよう。

### III 購入構成が類似する都市とその特徴

III では、各都市世帯が購入した水産物の総額に占める各品目の購入額の割合（すなわち、選択された品目の「組合せ」）が類似する都市を整理

し、その分布を確認する。手法は、Hayashi (2003) と同様に、Ward 法クラスター分析を行い、変化率が2番目に大きい段階で区分した。なお、参考として、1970・1990年代の場合での購入構成が類似する都市のグループについて、表4に示しておく。

この結果、2000年代については、47都市は三つのグループ（「北日本」・「東日本」・「西南日本」）に分類された（図3）。ただし、「東日本」に属する都市には、那覇市も含まれている。なお、クラスター分析の樹形図では、「北日本」と「東日本」が統合された後、最後にそれら（東北日本）と「西南日本」が結びついている。そして、僅差で3番目に変化率が大きかった段階を考慮し、上



表 4 購入構成が類似する  
都市グループ(1970・1990 年代)

Table 4 Groups of resembling cities by the  
point of purchase proportion, 1970s and 1990s

1970 年代のグループ		1990 年代のグループ	
1	札幌・青森・盛岡・ 仙台・秋田・山形・ 福島・水戸・宇都 宮・前橋・新潟・ 甲府・長野	I	札幌・青森・盛岡・ 仙台・秋田・山形・ 福島・新潟
2	浦和・東京・千葉・ 横浜・静岡・名古屋・ 岐阜・津	II	水戸・宇都宮・前 橋・さいたま・東京・ 千葉・横浜・ 甲府・長野・静岡・ 岡・名古屋・岐阜・ 津
3	富山・金沢・福井・ 大津・京都・大阪・ 神戸・奈良・和歌 山・岡山・広島・ 高松	III	富山・金沢・福 井・鳥取・松江・ 徳島
4	鳥取・松江・山口・ 徳島・松山・高知・ 福岡・佐賀・長崎・ 大分・宮崎・熊本・ 鹿児島	IV	大津・京都・大阪・ 神戸・奈良・和歌 山・岡山・広島・ 高松・松山・高知
5	那覇	V	山口・福岡・佐 賀・長崎・大分・ 宮崎・熊本・鹿児 島
		VI	那覇

Hayashi (2003) より作成.

述の三グループの下位区分を加えると、六つの小グループ（「北日本」のほか、「関東・東海」・「那覇」と、「西日本」・「九州」・「日本海沿岸」）に分類された。これは、表 4 に示した 1990 年代の結果とほぼ一致する<sup>2)</sup>。この三つのグループ、六つの下位区分ごとに、購入割合が高い・少ない品目を整理したものを、表 5 にまとめた。なお、参考として、1970・1990 年代の各グループの購入傾向の概要を、表 6 に示しておく。

基本的には、西南日本と東北日本での購入・選択の「地域差」は顕著であり、2000 年代もこの点やその分布境界の位置に変化はなかった。ただし、

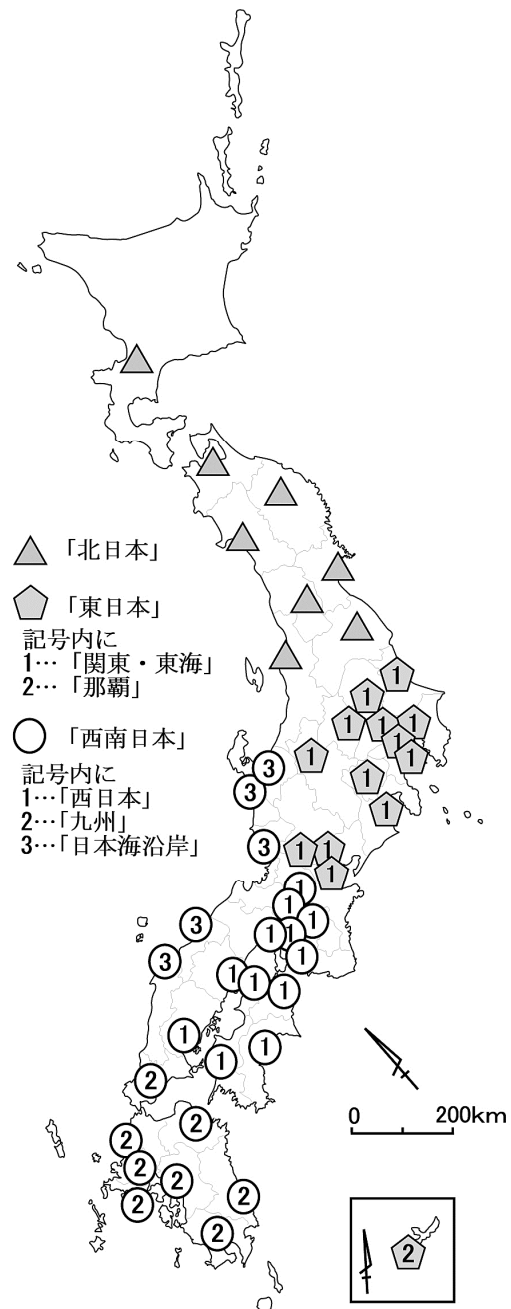


図 3 購入構成が類似する  
都市グループ(2000 年代)

『家計調査年報』各年次より作成.

Figure 3 Groups of resembling cities by the point  
of purchase proportion, 2000s

以前の結果と比べると「西南日本」に含まれる地域でグループの集約が進んだ。購入行動の都市間での「平均化」が 2000 年代にさらに進んだ結果、

表5 2000年代のグループ・区分別の購入傾向

Table 5 Tendency of purchase for each groups / divisions, 2000s

	購入割合が多い品目		購入割合が全体の中で最小の品目
	平均～平均＋標準偏差	< 平均＋標準偏差	
<b>&lt;3グループ&gt;</b> 北日本	マグロ、カツオ、イカ、シジミ、カキ、タラコ、かまぼこ、魚介缶詰、ワカメ	カレイ、サケ、サンマ、ホタテ、塩サケ、魚介漬物	アジ、イワシ、サバ、タイ、ブリ、タコ、エビ、刺身盛り合わせ、アサリ、しらす干し、干しアジ、干しイワシ、さつま揚げ、ちくわ、鰹節・削り節、干しのり、昆布、昆布佃煮、ウナギかば焼き
東日本	サケ、サンマ、刺身盛り合わせ、アサリ、シジミ、カキ、ホタテ、塩サケ、タラコ、しらす干し、干しアジ、鰹節・削り節、魚介漬物、魚介佃煮、魚介缶詰、干しのり、ワカメ、ウナギかば焼き	マグロ	カツオ、カレイ、イカ、カニ、煮干し、かまぼこ
西南日本	アジ、イワシ、カレイ、サバ、タイ、ブリ、イカ、タコ、エビ、カニ、干しイワシ、煮干し、さつま揚げ、ちくわ、かまぼこ、昆布、昆布佃煮、ウナギかば焼き		マグロ、サケ、サンマ、シジミ、カキ、ホタテ、塩サケ、タラコ、魚介漬物、魚介佃煮、魚介缶詰、ワカメ
<b>&lt;6区分&gt;</b> 北日本	マグロ、カツオ、イカ、シジミ、カキ、タラコ、かまぼこ、魚介缶詰、ワカメ	カレイ、サケ、サンマ、ホタテ、塩サケ、魚介漬物	サバ、タイ、エビ、刺身盛り合わせ、さつま揚げ、干しのり、ウナギかば焼き
関東・東海	サケ、サンマ、刺身盛り合わせ、アサリ、シジミ、カキ、ホタテ、塩サケ、タラコ、しらす干し、魚介漬物、魚介缶詰、干しのり、ワカメ、昆布佃煮、ウナギかば焼き	マグロ、干しアジ、魚介佃煮	かまぼこ、昆布
那覇	サケ、エビ、アサリ、かまぼこ、ウナギかば焼き	マグロ、サバ、サンマ、刺身盛り合わせ、鰹節・削り節、魚介缶詰、干しのり、昆布	アジ、イワシ、カレイ、ブリ、イカ、カニ、シジミ、カキ、塩サケ、タラコ、しらす干し、干しアジ、干しイワシ、煮干し、ちくわ、魚介漬物、魚介佃煮、昆布佃煮
西日本	カツオ、サバ、タイ、ブリ、エビ、カニ、カキ、しらす干し、干しイワシ、煮干し、さつま揚げ、ちくわ、昆布、昆布佃煮、ウナギかば焼き	タコ	ワカメ
九州	ブリ、エビ、刺身盛り合わせ、アサリ、タラコ、干しアジ、干しイワシ、さつま揚げ、ちくわ、かまぼこ、鰹節削り節、干しのり、昆布	アジ、イワシ、サバ、タイ、煮干し	サンマ
日本海沿岸	アジ、イワシ、サバ、ちくわ、かまぼこ、魚介漬物、昆布佃煮	カレイ、ブリ、イカ、カニ、シジミ、昆布	マグロ、カツオ、サケ、タコ、アサリ、ホタテ、鰹節・削り節、魚介缶詰

『家計調査年報』各年次より作成。

表 6 1970・1990 年代のグループ・区分別の購入傾向

Table 6 Tendency of purchase for each groups / divisions, 1970s and 1990s

1970 年代の場合			1990 年代の場合		
グループ	購入が多い品目 (＜平均＋標準 偏差)	購入割合が全体の中 で最小の品目	グループ	購入が多い品目 (＜平均＋標準 偏差)	購入割合が全体の中 で最小の品目
1	サケ, サンマ, 塩 サケ, 魚介漬物	サバ, タイ, エビ・カ ニ, ちくわ, かまぼこ, 鰹節・削り節	I	サケ, サンマ, ホ タテガイ, 塩サ ケ, 魚介漬物	サバ, タイ, エビ, 刺 身盛り合わせ, アサ リ, 鰹節・削り節, 干 しのり, ウナギかば焼 き
2	マグロ, 干しア ジ, 干しのり, ウ ナギかば焼き	昆布	II	マグロ, 干しア ジ, 魚介佃煮	イカ, かまぼこ, 昆布
3	エビ・カニ	マグロ, シジミ, 魚介 缶詰, ワカメ	III	カレイ, プリ, イ カ, カニ	カツオ, タコ, ホタテ ガイ, 魚介缶詰
4	アジ, イワシ, サ バ, 煮干し	サンマ, タコ	IV	タコ	ワカメ
5	マグロ, サンマ, タイ, シジミ, か まぼこ, 鰹節・削 り節, 魚介缶詰, 昆布	アジ, イワシ, カツオ, カレイ, サケ, プリ, イカ, タラ, ヒラメ, アサリ, カキ, 塩サケ, しらす干し, 干しア ジ, 干しイワシ, 煮干 し, さつま揚げ, ちく わ, 魚介漬物, 魚介佃 煮, 干しのり, 昆布佃 煮, ウナギかば焼き	V	アジ, イワシ, サ バ, タイ, 刺身盛 り合わせ, 煮干し	マグロ, サケ, サンマ, シジミ
			VI	マグロ, サンマ, 刺身盛り合わせ, 鰹節・削り節, 魚 介缶詰, 干しの り, 昆布, ウナギ かば焼き	アジ, イワシ, カレイ, プリ, カニ, カキ, 塩 サケ, たらこ, しらす 干し, 干しアジ, 干し イワシ, 煮干し, さつ ま揚げ, ちくわ, 魚介 漬物, 魚介佃煮, 昆布 佃煮

Hayashi (2003) より作成.

注：両年代の各グループに属する都市は、表 4 と一致する。

都市間の購入構成の類似度が一層高まり、グループ数が減じたものと考えられる。ただし、各々の下位区分に属する都市を確認すると、従前の分布傾向を継承している。

なお、1960～1990 年代においては、購入傾向が類似する都市の広がりについては、年代を経ても大方の特徴は継承されていたものの、流通の変化などの影響を受けて各都市が属する区分には年代により若干の変動があった。各グループの購入を特徴づける品目についても、年代により変化がみ

られた。これに対して 2000 年代の結果は、1990 年代の結果からほとんど変化がなく、購入傾向が共通する都市の分布は安定している。また、各グループでの主な購入品目・購入割合が小さい品目についても、1990 年代と 2000 年代では大きな変化はない。加えて、他のグループに比べてあるグループの購入割合が著しく大きくなる品目は、その種類を減じた。

これらの点については、先の指摘と共通するが、すでに「平均化」が一定程度進展したことで著し

い購入傾向の変化が生じなくなっているため、購入にみられる「地域差」（購入傾向が類似する都市の広がり）に変動が起きなかったものと思われる。また、地域ごとに好まれる品目、あまり利用されない品目の傾向には大きな変化は生じていないものの、「平均化」が進んだ結果、特定のグループでの購入割合が他と比して突出する品目は減少したと考えられる。以上を考慮すると、全体としては、購入傾向が類似する都市グループの集約化はみられたものの、水産物購入にみられる地域らしさ・地域特徴とその分布傾向は引き続き継承されているといえる。

今回の考察では、那覇市が日本の南部に位置する都市にもかかわらず、「東日本」に集約されている。ただし、下位区分では、「関東・東海」の各都市と一線を画している。那覇市は、2000年代以前の考察でも一貫して独自区分で説明され、西南日本側のグループではなく関東地方が含まれるまとまりと先に結びつく形でクラスター分析の樹形図が描かれてきた。那覇市の購入構成を確認すると、この地域で水揚げのあるマグロ類の重要性が高いことのほか、当地の漁業活動とは関係が薄いもののサケやサンマの購入割合が高いことが、「東日本」に含まれる各都市の購入傾向と類似する要因となっている。この点に関しては、その詳細は稿を改めて考察する予定である。水産物や魚食習慣のある地域への定着やそれを支える流通構造、地域間のつながりに関する研究の深化は少ないが、地理学的研究はその解明に貢献できる可能性を有している（清水 2008）。他の都市、個々の品目に関する考察も、今後の課題としたい。

また、山口市は、従前の結果と同様、九州地方の都市とともに集約された。山陰地方の2都市も、「西日本」の区分ではなく北陸地方の3都市と同じ区分にまとめられた。整理されたグループの分布の様子と日常生活の多くの場面で用いられる行政境界とのずれは、食文化の成立や地域の広がりを見つめる際に興味深い示唆を与える。

品目の選択は、「西南日本」と「北日本+東日本」（東北日本）との間で対照的な傾向にある。当該地域で生産がみられる寒流系、暖流系いずれ

かの魚種の重要度が高いほか、各地で親しまれてきた加工品や嗜好の差に応じて地域間の購入割合に違いが表れている。また、鮮魚の購入割合が高いグループと加工品のそれが高いグループとの差は、地域の漁業活動の活発さや地域の食文化の影響、地域で生産可能な水産物・タンパク質食材の質量両面での季節的变化の影響、鮮魚購入をとりまく諸条件（たとえば、価格帯の問題や鮮度保持の影響、鮮魚店の存在など鮮魚購入がしやすい環境の有無、各世帯で鮮魚が家庭内調理される頻度とその技術習得の状況等）などに関連があると考えられ、その詳細は事例研究の中で確認する必要がある。

#### IV おわりに

本研究では、2000年代の都道府県庁所在都市の世帯の水産物購入を取り上げ、購入構成の「平均化」の進展状況と「地域差」の継承の様子について考察した。

その結果、都市間での購入のばらつきは、とくに購入割合が拡大傾向にある品目や主要な生鮮魚介でジニ係数の低下がみられ、2000年代の購買傾向が1990年代以前に各地でみられた状態まで逆戻りしなかったことが分かった。水産物を購入するときの品目の「組合せ」の面から注目する限りでは、地域の食文化・食材に対して人々が関心を持ちやすい状況があったと考えられる2000年代にあっても、食の多様化・簡便化の影響は強く、地域の食卓の特徴の維持や復権への影響は限定的であった。一方、それぞれの品目に関する購入割合の大きいあるいは小さい都市の分布や、購入構成が類似する都市の分布傾向に関しては、その特徴を2000年代も継承しており、「西南日本」と「北日本+東日本」（東北日本）との差異が健在であった。

今回の調査は、冒頭で述べたように、購入される品目の「組合せ」の様子とその変化からみた「平均化」や「地域差」の検証である。この結果のみで地域の食文化や水産物の利用について評価を下すことは、それらの十分な理解とはいえない。資

料の制約などにより検証に限界があるが、「組合せ」以外の観点からも可能な限り傾向や課題を考察し、それらを重ね合わせて地域特徴とその活用を考えることが望まれる。個別の水産物に注目した研究の中で、生産・流通段階の考察とともに消費の詳細も明らかにすることも、理解の深化につながる。また、各都市の水産物の購入構成について、本稿では細部の分析には至らなかった。これについても、事例研究の蓄積が待たれる。

結果の検証にあたっては、資料の制約から購入された水産物の産地・製造地、生産方法や価格帯・品質の違いなどは確認することができない。このため、たとえば、各地域で従前から多く購入されてきた水産物を引き続き購入していたとしても、その産地や原料供給地域が地元ではない可能性も考えられる。つまり、購入される品目の「組合せ」や食事の様子は、一見すると昔から継承されてきた“地域らしい”特徴を持っているように感じられたり、地域に伝承されている献立が多用されていたとしても、それらが（輸入品を含む）他地域の水産物や養殖品に支えられることで成立している場合も考えられる（秋谷 1995; 本多・小野 2000; 中居 2003b; 増井 2003）。このことは、地域の食文化や地域性とはどのような条件で成立し、継承され、認められる（ことが望ましいと人々が考える）ものであるか、という問いを我々に投げかけてもいる。

逆に、人々の間で「地産地消」に関心が向けられることで、ある品目・献立に関して以前には他産地産の水産物・原料が多く用いられていた状況から、地域内で生産・製造されたものの利用に置き換わる現象がみられる可能性も考えられる。もしそうであれば、各々の地域への人々の注目の高まりや、（従前十分に対応できていなかった）地域資源の活用機会・方法の創出がみられる可能性があり、「組合せ」の継承とは違う側面からこの現象を評価できる余地もあるだろう。ただしこの場合でも、地場産、地元産、地域産という場合の「地域」とはどのような範囲を指すのか、そしてその条件となり得る事象や、人々が判断材料とする諸指標、それらが選択される理由はどのようなも

のだろうか。本稿ではこの点の検討の深化に至らないが、食と地域の関わりを考える上での今後の課題として別に追究が求められるだろう。

## 付 記

2009 年日本地理学会秋季学術大会（琉球大学）では、予察結果を報告した。本稿は、その後のデータ追加や修正を反映し、考察結果を報告したものである。

（2010 年 8 月 15 日受付 2010 年 11 月 13 日受理）

## 注

- 1) 小数点第 2 位で四捨五入した結果、100%を上回っている。
- 2) Hayashi (2003) でみられた 1990 年代の結果では、当該期間のイカの購入動向が影響して徳島市が「西日本」ではなく「日本海沿岸」のまとまりに含まれていた。それ以外の都市のまとまりは、本稿の結果と共通している。

## 文 献

- 秋谷重男 1988. 日本型食生活の行方—消費者の意識と関心—. 今村奈良臣・吉田 忠編『食生活変貌のベクトル』239-269. 農林漁村文化協会.
- 秋谷重男 1995. 消費、流通、そして産地—輸入物、養殖物の増加とアキサケ—. 漁業経済研究 39(4): 27-52.
- 秋谷重男 2006. 『日本人は魚を食べているか』漁協経営センター.
- 荒井良雄 2007. 社会の二極化と小売業態. 荒井良雄・箸本健二編『流通空間の再構築』1-17. 古今書院.
- 荒木一視 2006. 2004 年山口県阿東町で発生した鳥インフルエンザと鶏肉・鶏卵供給体系—フードシステムにおける食料の安全性とイメージ—. 経済地理学年報 52: 138-157.
- 有路昌彦 2006. 『水産経済の定量分析—その理論と実践—』成山堂書店.

- 池田真志 2005. 青果物流通の変容と「個別化」の進展－スーパーによる青果物調達を事例に－. 経済地理学年報 51: 17-33.
- 今田節子・藤田真理子 2003. 保存食「塩辛・魚醤」の伝統的食習慣とその地域性. 日本家政学会誌 54: 171-181.
- 小川砂郎・臼井一茂・石井隆之・山本章太郎・石井 洋・加藤健太・山本貴一・江川公明 2003. 神奈川県下消費者の魚介類イメージに関する意識調査. 神奈川県水産総合研究所研究報告 8: 25-32.
- 小川真理 1998. 水産物の家庭内消費. 地域漁業学会編『漁業考現学』287-298. 農林統計協会.
- 小野征一郎 1986. 低成長下におけるサケマスの消費・需要. 北日本漁業 16: 21-34.
- 小野征一郎 1994. さかな消費. 東京水産大学 第 8 回公開講座編集委員会編『暮らしとさかな』1-12. 成山堂書店.
- 片岡千賀之 2002. アサリ漁業の構造変化－熊本有明を事例として－. 地域漁業研究 42(3): 27-46.
- 金城須美子 1997. 沖縄の食文化の特徴と水産物消費動向. 魚まち 14: 36-44.
- 久賀みずほ 2008. 消費者の購買行動. 小野征一郎編『養殖マグロビジネスの経済分析』133-168. 成山堂書店.
- 佐々木 馨・大石圭一 1994. 昆布食類型分布の研究・第 5 報. 類型成因の比較考察. 北海道教育大学紀要 (第 1 部 B) 45(1): 1-10.
- 佐野雅昭 2003. 『サケの世界市場』成山堂書店.
- 篠原秀一 2005. 地域ブランド水産物と地域に根ざした水産物. 地理 50(5): 48-58.
- 清水克志 2008. 日本におけるキャベツ生産地域の成立とその背景としてのキャベツ食習慣の定着－明治後期から昭和戦前期を中心として－. 地理学評論 81: 1-24.
- 仙田徹志・吉田 忠 2002. 現代日本の食糧消費における支出格差とその要因. 吉田 忠・広岡博之・上藤一郎編『生活空間の統計指標分析: 人口・環境・食料』159-193. 産業統計研究社.
- 高島 賢 2005. 食文化からはじまる地域個性の創出－御食国若狭おばま－. 地域政策研究 30:40-46.
- 高橋正郎 2002. 『フードシステムと食品流通』農林統計協会.
- 高柳長直 2006. 『フードシステムの空間構造論』筑波書房.
- 竹ノ内徳人 2005. 漁村における産地直売所の成功条件－愛媛県三崎漁協の取り組みを事例として－. 地域漁業研究 45(3): 115-129.
- 田坂行男 1999. スーパーマーケットの水産物仕入・販売戦略と既存流通への影響. 漁業経済研究 43(2): 1-23.
- 多屋勝雄 1991. 『国際化時代の水産物市場』北斗書房.
- 辻 雅司 2003. カツオのたたき製品における技術革新と遠洋カツオ漁業の構造変化－産地イノベーションとその波及過程の理論－. 食品経済研究 31:67-85.
- 中居 裕 2003a. カツオ節二次製品市場の成長とカツオ節加工業の再編. 地域漁業研究 43(2):19-28.
- 中居 裕 2003b. 銚子地区における塩蔵加工業の成立とサバ・サケ加工の構造. 地域漁業研究 43(3): 45-60.
- 中澤弥子・三田コト 2004. 長野県における「塩イカ」と「煮イカ」の食習慣の伝承と地域性. 日本家政学会誌 55: 167-179.
- 中田哲也 2004. 食料の総輸入量・距離（フード・マイレージ）とその環境に及ぼす負荷に関する考察. 農林水産政策研究所レビュー 11: 9-15.
- 中原尚知 2008. 量販店のマーチャндаイジング. 小野征一郎編『養殖マグロビジネスの経済分析』73-88. 成山堂書店.
- 長谷川 彰 1979. 水産物消費・需要変化の要因. 漁業経済研究 25(1): 1-20.
- 林 紀代美 2007. 水産業・水産物を活用した食に関わる学校教育活動の可能性と課題－小浜市立田島小学校の事例から－. 地域漁業研究 47(2・3): 265-281.
- 日高 健 2007. 『都市と漁村－新しい交流ビジネス－』成山堂書店.
- 二木季男 2004. 『地産地消マーケティング』家の光協会.
- 平安山明子・村田 晃 2006. 沖縄県における栄養素等と食品群別の摂取状況. 永原学園西九州大

- 学・佐賀短期大学紀要 36: 111-118.
- 堀井正治 1996. 日本人の食生活と地域特性. ヨーゼフ・クライナー編『地域性から見た日本』146-177. 新曜社.
- 本多秀臣・小野征一郎 2000. アジ干物後産地・大洗の台頭. 地域漁業研究 40(2): 141-154.
- 増井好男 2003. 『魚と食と日本人』筑摩書房ブックスレット.
- 三木奈都子 2006. 漁村の動向と水産物流通. 加瀬和俊編『わが国水産業の再編と新たな役割—2003年(第11次)漁業センサス分析—』202-231. 農林統計協会.
- 山口和子・高橋史人 1982. 食品の嗜好に関する研究(第2報)属性と食品の好みの関係. 調理科学 15: 104-113.
- 吉田 忠 1988. 食生活の「洋風化」—米食型食生活の転換—. 今村奈良臣・吉田 忠編『食生活変貌のベクトル』72-91. 農林漁村文化協会.
- 若林良和 2008. 『ぎょしょく教育 愛媛県愛南町発水産版食育の実践と提言』筑波書房.
- Hayashi, K. 2003. The difference between cities and the change for the constitution proportion of fisheries commodities purchase. 地域漁業研究 *Journal of Regional Fisheries* 44(1): 69-81.
- Murdoch, J., Marsden, T. and Banks, J. 2000. Quality, nature, and embeddedness: Some theoretical considerations in the context of the food sector. *Economic Geography* 76: 107-125.
- Nygård, B. and Storstad, O. 1998. De-globalization of food markets? Consumer preceptions of safe food: The case of Norway. *Sociologia Ruralis* 38: 35-53.

<著者略歴> 林 紀代美 (はやし きよみ)

1974年 山口県生まれ. 金沢大学准教授. 博士(人間・環境学). 専門は水産地理学. 下関漁港・商港における水産物流通の空間構造(地理学評論 74A-9), Comparative study on the feature and evaluation of the production and trade activity on capelin for human consumption exported to Japan (地域漁業研究 47-2・3).